

在米片山潜が発行した『平民』について

——総目次と発見された第13号

田村 貞雄

はしがき

- 1 片山潜の遠州三倉村遊説
- 2 片山潜の三倉村同志への書翰
- 3 『平民』の発行

あとがき

はしがき

1914年4月第1次大戦が勃発した。大戦勃発を契機に、戦争と革命をめぐる第二インターナショナルの分裂が始まる。

同年9月片山潜はアメリカに向かった。当初は8月下旬に開かれる第二インターナショナルのウィーン大会出席が目的であり、片山はシベリア鉄道経由で渡欧しようとしていた。しかし戦争勃発で大会は中止されたため、片山は渡欧計画を渡米計画に変更した。実際には、日本の運動に絶望して渡米することになった。サンフランシスコに居を定めた片山は、さまざまな職業に従事しながら、移民問題に直面し、また1915年における友愛会の鈴木文治の渡米に刺激されている。片山は「ソシアリスト・レビュー」に寄稿しはじめ、日本の堺利彦・山川均らの『新社会』にも通信を送るようになった。

1916年5月片山は月刊雑誌『平民』を発行した。タブロイド版でわずか8ページの雑誌であるが、在米日本人の運動情報のほか、日本の情報や片山の論評を掲載した。これには、野中誠之⁽¹⁾と岡繁樹⁽²⁾の助力があったという。

同年12月片山はニューヨークに移り、『平民』を細々と発行をつづけた。ニューヨークでは、オランダの社会主義者ラトカーズ（リュトヘルス）の助力があり、片山はしだいに左派の運動にかかわりを持つようになった。1917年3月のロシア二月（旧暦）革命勃発に引き続き、11月の十月革命

(1) 野中誠之については、吉田隆喜『無残な敗北－戦前の社会主義運動を探る』三章文庫、2001、がもっとも詳しい研究である。

(2) 岡繁樹「片山潜とアメリカ」『改造』32-8、1951.07、pp.77-83。

は、片山の運命を変えた。ニューヨークでのロシアの社会民主労働党（ボルシェビキ）との接触は大きな転機となった。

やがて片山は第三インターナショナルへの参加とアメリカ共産党結成を積極的に進めた。『平民』は1919年6月の21号まで発行されたようである。

残念ながら『平民』の各号は全部は見つかっていない。

本稿は、『平民』の概要とともに、片山が静岡県周智郡森町の2人の有志に『平民』を送ってきた事情を紹介し、総目次と森町で見つかった13号（1917年10月発行）の紹介である。

1 片山潜の遠州三倉村遊説

1908年（明治41）1月25日午前5時20分、東海道地方遊説中の片山潜と鈴木楯夫の2人は、袋井駅で下車した。駅には静岡県周智郡三倉村の中川栄太郎と松井八郎が迎えにきており、一行は駅前の馬車屋を叩き起して森町経由三倉村へ向かった。

この遊説については片山潜がくわしい「東海道遊説日記⁽³⁾」を旅先から自派の『社会新聞』に書き送っており、また自伝⁽⁴⁾のなかでもくわしく触れている。

当時片山らは、田添鉄二、西川光次郎らと社会主義同志会を結成し、『社会新聞』を発行していた。前年（1907年）2月の日本社会党第2回大会での幸徳秋水と田添鉄二の議会政策をめぐる論争以来、幸徳ら無政府主義派の直接行動論と田添らの議会政策論との分岐が深まり、その年の夏には、幸徳、堺利彦、山川均らの金曜会と社会主義同志会の組織的対立にまで至っている。

この時期には片山の属する社会主義同志会は、地方での同志獲得を求めて盛んに遊説を行った。西川光二郎は北海道を遊説し、片山・鈴木は1908年1月4日に東京を出発、中央線にて甲府に至り、山梨県各地を遊説して甲府支部の結成に成功し、その後富士川を船で下って静岡県に入り、静岡市と江尻町（現静岡市清水区）で演説会を開き、静岡支部の結成に成功した。さらに彼らは愛知県、岐阜県に赴き、連日のように演説会を各地で開いて同志獲得につとめたのである。

彼らが静岡市に滞在していた1月12日朝のことである。社会主義同志会静岡県支部となった市内四つ足町（現中町）の歯科医長谷川吉蔵宅に居た片山らを「三河三倉村の同志」で「同村農民の団体至誠会の副会頭」が訪ねてきた。「三河」というのは遠江の誤りで、三倉村は周智郡に属し、森町の北方に位置する小村である。至誠会はどういう団体か不明であるが、会頭（長）は前村長高野五左衛門であり、高野が三倉周辺ではもっとも早く1880（明治13）年に結成された黒田報徳社の創立者でもあることから、報徳主義の団体と思われる。

その副会頭が三倉村一の瀬の中川栄太郎である。中川はすでに『平民新聞』を購読しており、熱心な社会主義者であった。

中川の求めに応じて片山と鈴木は東海道遊説の最後に三倉村を訪れることを約束した。片山らは

(3) 『社会新聞』32号（1908年1月12日付）より35号（同年2月2日付）まで6回分載（34号に3回分掲載）。本稿でとりあげる三倉村訪問記はその（六）（35号所載）である。

(4) 片山潜『わが回想』下、徳間書店、1967、p.213。

1月24日に愛知県渥美郡田原町で演説会を終えたのち、夜の11時に同町を馬車で出発した。前掲の「東海道遊説日記」によると、「豊橋に達したるは午前一時、汽車（ママ）待ち合わせの爲め三時間余を費やし袋井駅に達したるは五時二十分⁽⁵⁾」とある。

彼らは駅頭に出迎えていた中川らの案内で馬車に乗り、森町を経て三倉村に至った。そして榮泉寺において演説会を開いたが、この山村には珍しく農民200名が集まって熱心に片山・鈴木の社会主義演説を聞いた。のちに村会議員をつとめ、青年団、報徳社でも活躍した中野連太郎氏は、鈴木楯夫の激越な演説を記憶しておられ、感動して大枚50銭を寄付したと筆者に語られた⁽⁶⁾。東海道遊説全体の寄付金の中でも三倉村の人びとの寄付は大きな比重を占めており⁽⁷⁾、片山も鈴木もこもこも三倉村での厚遇をのちのちまで語っている⁽⁸⁾。社会主義運動の分裂、弾圧の強化という当時の困難な状況の中で、三倉村の人びとの熱心な社会主義運動への関心は、片山らの精神的な支えともなった。

1977年中川栄太郎の孫にあたる中川勝巳氏宅より、大量の社会主義関係の新聞や書籍、片山をはじめとする中央の社会主義者たちからの書簡が発見され、大きな話題を呼んだ。資料の発見者は、当時静岡県労働組合評議会の嘱託だった故杉山金夫氏（1925年10月4日—1988年2月15日）である。杉山金夫氏は静岡県職員組合の活動家で、1954年1月全日本自治団体労働組合（自治労）が結成された。その初代中央執行委員に東海地方代表として杉山金夫氏が選ばれた。初代の青年婦人部長でもある。

この時杉山氏は静岡大学法経短期大学部（夜間部）の学生でもあり、初代学生自治会委員長をつ

(5) 『汽車汽船旅行案内』（庚寅新誌社 交通博物館蔵 1907年11月）によれば、豊橋発午前3時09分の新橋行急行（神戸始発）があり、これに乗車すれば午前3時54分に浜松に到着する。ここで、一旦下車し午前4時45分発の掛川行（浜松始発）に乗れば、午前5時20分に袋井に到着（ただしこの時刻は発車時刻）する。片山の記述では豊橋で3時間余も待ったようだったが、これは2時間余であろう。

(6) 1982年4月17日森町黒田（旧三倉村）の中野連太郎氏宅で聴取。中野氏はその1ヶ月あまり後に98歳で大往生を遂げられた。

(7) 『社会新聞』37号（1908年3月1日付）に掲載された「東海道遊説寄付金」報告によると総額25円のうち三倉村の人びとは12円50銭を寄付している。ちなみに山梨県全体で2円、静岡支部が2円50銭、亀崎町友愛義団（宮下太吉ら）が2円、名古屋有志が6円という内訳であった。片山は「東海道遊説雑感」（『社会新聞』37号、1908年3月1日付）の中で「今回地方の遊説をなして意外なる所に我同主義者の在る事を知り頗る意を強ふせり」と「隠れたる同志」の存在を強調している。

(8) 片山はニューヨークから鈴木楯夫宛に出した1920（大正9）年8月24日付の書翰で「ことに僕は日本の労働者および社会運動に対しては、僕のもっとも盛なる元気のある時にやったので、これを片時も忘る事は出来ない。これを思う毎にわれわれ困難の間にやった運動はいつも念頭に浮ぶのです。彼の甲府や静岡、三倉村などに行き好遇せられたことや、四日市其他、大阪地方、金沢辺で失敗したことを忘れることは出来ません。」と述べている（岡田宗司編『革命的社会主義への道——片山潜遺稿』刀江書院、1970、p.282）。鈴木もまた同年9月2日付の中川栄太郎宛の手紙のなかで、「貴兄を思ふ毎に、貴家の前に流れて居る川と、後ろの山を考へます。川の水はキレイでした。演説会場に当てられた寺は影色の好い所だとの記憶が起つて来ます。思想の友は十年も何年も変りません。」と述べている。杉山金夫『静岡県社会運動史研究』（杉山金夫遺稿集刊行会 2004年）所収。同書については、『初期社会主義』17号（2004年、pp.250-253）所載拙稿参照。

とめたこともあった。1955年に同自治会が山川均と羽仁五郎を招いて講演会を行なった時、すでに卒業して静岡県職員組合、静岡県評・静岡地区労・左派社会党静岡支部の有力な活動家であった杉山氏は、これに全面的に協力され、市内沓谷霊園にある大杉栄の墓に山川均を案内し、以後大杉墓前祭を終生主宰された。

1957年杉山氏はモスクワで開催された世界青年学生平和友好祭に参加し、日本代表団の旗手をつとめられた。1961年総評が東ドイツに派遣した留学生の一人として、杉山氏は自治労から選ばれて参加され、ライプチヒ大学で2年間ドイツ語の教育を受け、1963年にフンボルト大学哲学部歴史学科に入学し、1968年まで在学された。卒業研究はドイツ革命運動史であったという。

帰国後は、自治労の東海地連事務局長を3期、静岡県職員組合の専従役員を5期勤められた。くわしい事情は分らないが、その後、運動の中心から外れ、静岡県評の嘱託として、停年まで過ごされた。氏はすでにドイツ革命運動史をあちこちの新聞雑誌に寄稿していたが、やがて静岡県の社会運動史を手がけるようになった。

1977年に、杉山氏は『社会新聞』を検討し、袋井駅に下車して三河三倉村に行ったという記述に疑問を持ち、これは周智郡の三倉村（現在森町）ではないかと思い、演説会場の栄泉寺に電話された。栄泉寺には片山潜らの講演の記録はなく、郷土史家の小林小三郎氏を紹介された。小林氏は若い頃、村内一之瀬の中川家に「平民館」という看板がかかっていたことを思い出され、杉山氏を案内された。天井裏からおろされた鼠の糞だらけの茶箱を開けると、多数の書翰と社会主義関係の書籍と雑誌が出てきたのである。そのなかに当初の祖父に当る中川栄太郎宛の片山潜の書翰があった。中川家には、片山潜が英文で揮毫した2つの掲額があった。

「The Workers of Whole World Unite!

By Marx

S. S. Katayama」

「Work according your Ability

Divide in Justice for All.

By S.Katayama」

小野家にも書籍や新聞雑誌があるという話を聞いて、同家を訪れると、同家の先代の藤一郎（旧姓森下）宛の幸徳秋水の書翰と片山潜から送られたという英和辞書があった。

杉山氏は当時中日新聞の静岡版（県東部は東京新聞）の夕刊に静岡県の自由民権運動以来の社会運動史を「隠れた民衆史」として連載しておられ、早速三倉村の新史料を取り上げられた。

杉山氏はNHK静岡放送局にも相談された。当時同局のディレクターだった渡辺房男氏（のち作家）が、わたしが在職していた静岡大学教養部の知り合いの教員に、日本近代史の専門の教員に協力を求めて幸徳秋水の2点の書翰の写真を託された。これが1910（明治43）年5月1日付と5月1日付の湯河原からの書翰で、幸徳はこの月末に大逆事件で逮捕されるのである。

この写真を渡されて驚いたわたしは、早速杉山氏に連絡をとり、学生とともに史料整理にあたった。そして杉山氏と発起した静岡県近代史研究会の『静岡県近代史研究』創刊号に杉山論文と主要

史料を掲載したのである⁽⁹⁾。

所蔵書籍のなかに片山潜在『都市社会主義』があった。どうして都会風の社会主義が農民の共鳴を得たのか疑問があった。調査のたびに定宿にしていた旅宿兼食堂の島屋のおかみさんから、「ここは秋葉街道だからですよ」と言われた。秋葉街道というのは、秋葉三尺坊への参詣路で、近世には東海道の掛川宿から入り、秋葉山に登り、三尺坊を参詣したあと、三河に入り、鳳来寺に参詣し、豊川稲荷を経て御油宿で東海道に合する脇街道である。途中森町には75軒の旅宿があり、朝、宿を出て三倉はちょうど昼の弁当を使う休泊所だった⁽¹⁰⁾。芸者のいる料理屋もあったという。また「すべての道は秋葉に通ず」といわれるように、信濃、三河、遠江の各地からさまざまな秋葉街道があった。

戦前の島屋はバス停を経営していて、袋井経由で東京や大阪までの連帯切符を販売していた。その料金表が食堂に掲げられていた。わたしは前掲史料解説において、三倉村が秋葉街道に面した山村であると述べたのであるが、この時には秋葉街道についてはほとんど知識を持っていなかった。しかし秋葉街道を知れば知るほど、東京方面の情報が早く入ってくる重要ルートであることを認識したのである。

わたしは、当時の片山潜在同志の千葉県出身の座間止水とともに「村落社会主義」を唱え、普通選挙法制定運動と、等級制選挙法の町村議会で、二級民が団結する二級民団運動を呼びかけていたことを知り、千葉県出身者の社会主義運動の研究をした⁽¹¹⁾。

また秋葉街道及び秋葉信仰の研究をはじめ⁽¹²⁾、そこから幕末の「ええじゃないか」の研究⁽¹³⁾に深入りするようになった。東海地方の「ええじゃないか」においては秋葉三尺坊の御札が伊勢神宮の御札降りより多かったからである。

2 片山潜在の三倉村同志への書翰

閑話休題。1914年の第二インタナショナル大会に片山潜在が出席することを三倉村の中川栄太郎に

(9) 杉山金夫「遠州三倉村と明治社会主義」、及び「新たに発見された幸徳秋水、片山潜在等の書簡」（ともに『静岡県近代史研究』創刊号、1979年）、杉山金夫『静岡県社会運動史研究』（杉山金夫遺稿集刊行会、2004年）所収。

(10) 近世の関東東北地方からの伊勢参詣日記を分析すると、日記を書いた伊勢参詣者の8割が、掛川宿からの秋葉街道経由であった。拙稿「近世のお伊勢参り道中日記一覧」地方史静岡刊行会『地方史静岡』29、2001.04、pp.57-75。

(11) 拙稿「明治末期の村落社会主義——座間止水と二級民団運動——」静岡県近代史研究会『静岡県近代史研究』5、1981.05、pp.102-117、「村落社会主義の周辺——吉田璣・白鳥健と千葉県社会主義運動——」『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学編、17-1、1981.09、pp.1-40、「社会主義者吉田璣と網走の『北拓新聞』北海道史研究会『北海道史研究』30、1982.10、pp.28-31。

(12) 拙監修『秋葉信仰』雄山閣出版、1998、その他。

(13) 拙著『ええじゃないか始まる』青木書店、1987、最近作「「ええじゃないか」の東進——遠江・駿河・伊豆——」日本大学国際関係学部国際関係研究所『国際関係研究』28-4、2008.02、pp.357-395。

知らせてきたのは、堺利彦である。7月19日付の書翰がそれで、餞別の拠出を依頼したものである。

「突然ながら一筆呈上いたし候

今回片山潜奥国井シナに於ける万国社会党大会参列旁に欧米漫遊の途に上られるにつき、友人中より各自相応の会費を拠出し全君に贈呈して別意を表し度と存候、貴下おかれても何卒右御賛成の上何分御出金成下され奉願上候、御送金は片山氏へ直接にても宜敷候へとも、小生手元へ下され候ても宜しく小生手元に集まり候分は、一纏めに致して目録を附し小生より片山君の笑覧に供し申すべく候 匆々敬具

七月十九日 堺利彦

中川栄太郎君

（封筒裏）成るべく来廿五日迄に御返事願上候（売文社印）」（中川〔42〕⁽¹⁴⁾）すぐに片山潜からも書翰が届いた。7月21日付の中川栄太郎（英太郎と誤記）宛の書翰である。

「拜啓 貴下益御清榮奉賀候扱小包で一冊の書籍を送りましたが、あれは安部君の名前で発行はしても実際は僕が翻訳したのですから差上げた訳です⁽¹⁵⁾。頗る有益のものです。次に僕は今度八月廿三日から開ける万国社会党大会⁽¹⁶⁾に行つて見たいと思つて今僕の家を売らんと尽力して居る所です。多分来月の始二日頃に行く考へです。日本に居ても仲々生活が出来ないから一つ万国に向つて日本の社会党の事情を訴へたり進んで僕の一身の方法をも講じたいと随分苦しい犠牲を払つて行ふとしている所です。

七月廿一日

中川英太郎様 片山潜

旧森下藤一郎君へ宜しく」（中川〔13〕）

この書翰の5日後の7月26日にも葉書を出している。

「拜啓 此間御手紙を頂戴致しました時には僕より申上げましたあとでしたからお分りの事と存じまして失礼いたしました。

次に出来（発か）は愈来月二日に定めました。新橋より敦賀へ出て行く考へです。右は一寸御報知迄早々

七月廿六日」（中川〔14〕）

片山は敦賀から乗船し、シベリア鉄道でヨーロッパに向かう予定だったようだ。その前に中川は

(14) 杉山金夫『静岡県社会運動史研究』（杉山金夫遺稿集刊行会 2004年）所収。以下中川家文書及び小野家文書の文書番号は、本書による。

(15) 『労働問題及サンディカリズム』（安部磯雄訳大日本文明協会、一九一四年六月）で内容は、トマス・シュール・アダムスとヘレン・エル・サムナーの共著の「労働問題」とアーサー・クレーの「サンディカリズムと労働」の翻訳である。中川家には、「進呈 中川英太郎君、大正三年七月廿日片山潜」と署名された同書がある。

(16) オーストリアのウィーンで開催を予定されていた第二インターナショナルの大会。実際には第一次大戦勃発のため中止された。

なにがしかの饒別を片山に送ったのではないかと思われる。片山は7月28日付で、また書翰を送っている。

「拝啓 貴下益御壮栄奉賀候扱今回は僕が旅行致すに附大変御配慮を蒙り御厚意の段難有ぞんじます。此不景気の際にも拘はらず斯く御寄附下さいましたことは此上なき仕合です。僕も今度は是非海外の同志に訴へて一つ僕の排(ママ)水の陣を張って奮闘致す決心ですから何卒御承領(ママ)を願ひます。

尚ほ僕は愈来る八月三日新橋発午前八時三十分の汽車で敦賀に行き夫よりウラジル港に渡致します此時であれば静岡で一寸はお目に掛かれるかと存じますが、之は静岡の同志佐々井辰次郎(静岡市南安東千四百〇四番の四)に聞き合すか、又は旅行案内で分ります。

併しお気の毒ですからお目にかからなくとも御芳志は忘れません。又出来る丈ケ通信も致します。

尚ほ森下藤一郎氏へ宜しく、僕は多忙で失礼して居ますから、右は早々 不一

七月廿八日

片山潜

中川栄太郎様」(中川〔15〕)

東京出発は8月3日付で知らせている。ところが予定に変更があったらしい。その連絡を7月29日付にて葉書で知らせている。

「拝啓 此間の書面に三日に東京を立つと申し上げましたが種々の事情が出来て三日には間に合はないかも知れないから左様御承知願ひます。併し慥かの事は追って申し上げます。右は一寸お知らせします。都合によれば二三日後れるかも知りません。 潜

七月廿九日」(中川〔16〕)

ところが前述のように、ウィーンでの第二インタナショナルの大会は中止された。そこで片山は渡欧計画を渡米計画に変えた。次は8月25日付の書翰である。

「拝啓 戦争の爲め欧州行きは不可能となりました故今度は来る九月九日に横浜出帆の佐渡丸にて渡米致す事に相定ました。右御知らせ致します。実はシベリヤ行に致せは静岡にてお目にかゝれる事と楽しんで居ましたが止を得ません。何卒御自愛を遊されて御気嫌よう！写真を一葉記念のため差上げで(ママ)置きます。右ハ早々 不一」(中川〔17〕)

こうした片山は9月9日に横浜から佐渡丸でサンフランシスコに向かったのであった。残念ながらこの写真は残っていない。

翌1915年1月1日、かつて片山とともに三倉村を訪問した名古屋在住の鈴木楯夫からの書翰が届いている。

「謹賀新年

御地へ参りましてから最早七八年になります。月日のたつのは早いものではありませんか。其内に幸徳君は去る、片山君は米国に逃げる、運動は中止となる、然し吾人の蒔いた種は必ず生きるであらうと思ふ、あの、御地へ参りましたとき、帰りに馬車を止めて見舞ふた病床にありし御方は御無事でありますか、提灯屋の一家は如何になりました。嗚呼、顧みると夢の様です。斯して一日、一日を送り社会の進化を助く可きか、貴家の前に谷水の流れかあって、後ろが山であることをも今も記憶して居ります。」(中川〔25〕)

鈴木楯夫については、伊藤英一氏の詳細な研究（評伝・鈴木楯夫 名古屋社会運動の先駆者、ブックショップ「マイタウン」,1997）がある。

さて片山潜のアメリカからの書翰は残っていないが、雑誌『平民』が送られてきており、これに同封された書簡があったのではないと思われる。片山潜がモスクワに移ってから、交流があったかもしれない。

3 『平民』の発行

1916-1919年に、片山潜がアメリカで発行した『平民』については、岸本英太郎・渡辺春男・小山弘健『片山潜 第二部』（未来社 1960年）は、「特別要視察人状勢一斑⁽¹⁷⁾」や堺利彦の『新社会』に掲載された消息などから、1号から16号までの発行号数と年月を推定している。これに関連して、法政大学大原社会問題研究所が、「在米日本人社会主義者の機関紙『平民』について」（無署名、『資料室報』84, 1962.12, pp.1-16）で、館蔵資料について紹介した。

前述したように、1977年に静岡県社会運動史の研究者である故杉山金夫氏が、中川家及び小野家で幸徳秋水・片山潜関係の史料を発見されたが、そのなかに片山がアメリカから送ってきた『平民』誌が含まれていた。わたしも知らせを受けて、学生たちとともに史料の整理に当たった。ちょうど片山潜の伝記を執筆中の志賀義雄氏も、わたくしどもの何回目かの調査に同行されたことがあり、当時未発見の『平民』5号が含まれていたことから、その発見の意義を高く評価された⁽¹⁸⁾。

その後宮崎大学（現在九州大学）の山内昭人氏のアメリカ・オランダにおける詳細な調査により、アメリカにおける片山潜の活動の全容が判明した⁽¹⁹⁾。1989年山内氏は、オランダのアムステルダムにある社会史国際研究所スネーフリート文庫所蔵の第1号から第6号までを復刻・公表されている⁽²⁰⁾。

片山潜は渡米して以来、しだいに思想的変化を生じたようで、それが『平民』誌に如実に示されている。もともと片山は、幸徳秋水らの平民社のメンバーではなかったが、アメリカで平民社を創立し、『平民』を発行した。かつての論敵であった幸徳秋水が大逆事件で処刑されたことを悼み、幸徳の闘いを賞賛している。13号では「平民病院」（Heimin biyoin スペルは原文のまま）の訳語として「Proletarian Hospital」を使用しており、「平民」はプロレタリアートの意味でもあった。

(17) 近代日本史料研究会編「特別要視察人状勢一斑, 5-9, 続1-3」『日本社会運動史料』第2集, 明治文献資料刊行会, 1957-1962。

(18) 志賀義雄「新たに発見された片山潜の手紙と資料」『平和と社会主義』編集委員会『平和と社会主義』695-702, 1979.04.28-06.23。

(19) 山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル」1-8『宮崎大学教育学部紀要』社会科学, 49-79.1981-1995。のち『リュトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウィング——』ミネルヴァ書房, 1996。

(20) 山内昭人“Sen Katayama, S.J. Rutgers and H. Sneevliet, 1916-1921: In Reprinting Nos. 1-6 of *The Heimin*”『宮崎大学教育学部紀要 社会科学』66, 1989.09, pp.27-57。こういう資料の紹介あるいは復刻は、現在の出版事情からは、大学の紀要だからこそできることで、学恩に大いに感謝したい。

『平民』は1916年5月、第1次大戦のさなかに第1号が発刊されたが、サンフランシスコでは思ふような活動ができなかったらしく、同年12月ニューヨークに移った。ロサンゼルス野中誠之は、熱心な協力者で、しばしば寄稿しているが、1917年には、「我党支部の如き」（15号）とされ、また一時編輯を野中に委嘱したようである（17号）。

ニューヨークでは、当初、S. J. Rutgers宅に寄宿した。ラトガーを表記されることもあるが、かれこそ在米オランダ人社会主義者のリュトヘルスであり、山内昭人氏の前掲の力作『リュトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウイング——』（ミネルヴァ書房 1996年）に詳述されている。

1917年初頭にニューヨーク滞在中の片山潜は、リュトヘルスとともに、トロツキーに会うが、まもなくロシアで革命が勃発すると、その熱烈な支持者になった。1918年6月発行の16号には、冒頭にレーニンとトロツキーの論文を載せ、1918年11月発行の18号では日本の米騒動を報道している。

さらに1919年1月の19号ではドイツのカール・リプクネヒトの宣言を掲載、1919年5月の20号ではかれらの結成したスパルタクス（スパタカスと表記）の宣言を掲載した。この号では朝鮮の三一独立運動への支持を表明している。そして1919年6月の21号では、第三インターナショナル（コミンテルン）の結成宣言を載せている。

『平民』は、片山の自伝『わが回想』上下（徳間書店 1967年）によると、1919年7月の22号まで発行された。このころから片山潜はアメリカ共産党の結成運動に参加したため、自動的に廃刊したのではないと思われる。

ここで外務省外交史料館所蔵の「過激派其他危険主義者取締関係雑件 本邦人之部」（4門3類2項1-1-10）の所収史料を紹介したい。

上記史料所収の機密公第二七号「片山潜ノ活動ニ関シ報告ノ件」（大正六年六月廿二日 在紐育総領事矢田長之助より外務大臣法学博士子爵本野一郎宛）によれば、ニューヨーク総領事は、要視察人片山潜が桑港から紐育に至り、同年4月（6月か）第11号を発行したと外務省に報告し、これはニューヨークでの第3回目の発行であるとしている。この号のことは、ニューヨーク・トリビューン1917年6月18日号に「当地ニ於ケル社会主義者首領ハ日本人革命ヲ起サント云ヘリ」（Japanese are now ready to start revolution, says socialist leader here）と報じていると、第11号とともにその切抜きを添付している。この史料には、ニューヨーク及びサンフランシスコ総領事の報告が多数含まれており、両領事館は、平民創刊号からのすべての号を購入し（その会計報告も一部含まれている）、外務省に送ってきている。しかも外務省は『平民』誌を内務省に移管していることが分かる。なお、ニューヨーク総領事は、片山がニューヨークで頼った「蘭人シーボルト、ジアスチナス、ロットガース」についても探索して報告し（機密送第七号、大正七年九月十六日）、吉原太郎、野中誠之のほか、15号掲載の『平民の友』、17号掲載の木村駒子についても探索している。『平民』を発行する片山潜の活動は、両総領事館の探索の網の中にあつたというべきであろう。

これらは前掲「特別要視察人状勢一斑」の原資料である。

本史料については山内昭人氏の御教示による。

本稿においては、現在確認できる『平民』のリストと総目次を示すとともに、国内外のいずれの資料保存機関にも保存されていない小野家の13号の縮小版を掲げる。

この小野家文書の13号は、附表に見るように現存唯一のものであるので、その縮小版を末尾に掲載する。

1917年のメーデーの記事のほか、安部磯雄、高島素之、在パリの石川三四郎、ハワイの宮本要、名古屋の片桐市蔵からの書簡が掲載されている。他の号には堺利彦、山川均の書簡も掲載されており、日本の運動の情報源を示している。堺らが『新社会』を発行し始めると、重要な情報源となった。同誌はロサンゼルス野中誠之が取次ぎを行っている（12号）。

あとがき

読者各位におかれては、『平民』の未発見号の情報を寄せられることを期待したい。片山潜の書翰や刊行物は、都市部だけではなく、森町三倉村のような山間僻地で発見できる可能性もあると思う。それとともに、「村落社会主義」の思想と運動についても留意してほしい。

本稿の『平民』総目次と13号の紹介が、片山潜を中心とする在米日本人社会主義運動の研究に多少なりとも資することがあれば幸いである。

文中でも触れたが、本稿起草に当たっては、九州大学山内昭人氏の懇切な御教示を頂いた。深く感謝する次第である。

本来なれば、本稿は故杉山金夫が書く筈であった。杉山金夫遺稿集刊行会を興して『静岡県社会運動史研究』を編纂したものとして、代筆の努力をしたまでである。

(たむら・さだお 静岡大学名誉教授)